

NEXTリーダーが
オンライン&オフラインで
集まり、語り合う

若手教師・教育創造MTG ミーティング

第5回オンラインミーティング・レポート

「自由に語り合える場」の力を生かし、 新しい時代の指導をとともに模索する

全国の若手教師がこれからの教育について語り合う「若手教師・教育創造MTG」。2020年4月にオンラインミーティングをスタートし、その後は有志による対話の会などを重ねながら、12月には5回目のオンラインミーティングを開催。そこでは、全国の若手教師が課題や思いを語り合い、実践を共有する場をつくるなど、今後の展望がメンバーから語られた。



ともに次代を担う若手教師が、
それぞれの持つ課題感を知り、
学び合う

イマドキの進路指導とICT、
流行の中の不易を問う

2020年度、地域や公立・私立の壁を超えて組織された「若手教師・教育創造MTG」。ともに次代を担う仲間が、どのような課題を抱えているのかを知るため、今回のオンラインミーティングも、2人の教師の問題提起（囲み参照）から始まった。1つめのテーマは、「多様化・個別化しているキャリア教育における

教師のサポート」だ。発表者の教師の勤務校では、近年、スタディーサポートを繰り返し直し直すことによる学習習慣の確立や、定期考査前の講習の実施、1年次からの進路指導の充実など、生徒の希望進路の実現を支える校内体制づくりが進み、生徒の学習意欲は着実に向上している。その一方、「3年次の生徒の進路観が個別化・多様化する中で、一人ひとりの生徒に合ったサポートを模索している」と、自身の課題感を

私の教育活動 **喜 怒 哀 楽**

テーマ1 ● 多様化・個別化するキャリア教育

生徒一人ひとりを支えるために
大阪府立枚方なぎさ高校 ひらかた 萩原大希先生 はぎわらたいし

課題として直面していること（問いかけ）

- キャリア観が多様化・個別化している現代において、教員はどんなサポートができるのか。
- 多様化する選抜方法に対する出願指導（早期に決められる方がよいのか?）
- 急増する新しいタイプの学部、学科
- 社会の変化の速さ、家庭の文化資本の違い（情報を持っている、リテラシーが高い方が有利）
- コロナ禍や働き方改革による労働環境の変容

萩原先生
の
思い

学習習慣の確立と学習に取り組む動機づけは、生徒にとってはいわば自転車の両輪だ。学習習慣は教師の働きかけで一定の改善が見られているが、希望する進路先や進路に対する志望の度合いなどはますます多様化している。

萩原先生の発表に対する意見・感想

- ◎活動を都度振り返り、それらが将来にどうつながっていくのかを考えさせる活動が重要だ。自分の資質・能力を知って、ふさわしい進路を選べるように生徒を育てたい。
- ◎早期からの進路への意識づけが必要で、その時々を考えをポートフォリオとして蓄積させたい。それらを振り返ることとて生徒は自身の成長を俯瞰し、進路意識を深められる。

私の教育活動 喜 怒 哀 楽

テーマ2 ● ICT活用

ICT活用はどこまで進めるべきか

愛媛県・私立新田青雲中等教育学校 牧紘平先生

疑問

ただ活用するだけでは、情報と変わりないのでは？
費用対効果はどれほどのものか？
教育的効果を求める必要があるのでは？
GIGAスクール構想では必ず導入が先行しているように見える
格差もなくして導入というが、明らかな格差はある
お金をかければ、いくらかICT化は進めることができるが、単純なものではない

牧先生の 思い

各校でのICT環境の整備の進捗、ICT活用による成果や課題などを学びたい。それと同時に、ICT活用はどこまで進めるべきか、そもそも理想の生徒の姿はどのようなものか？といった本質的なテーマにも向き合いたい。

牧先生の発表に対する意見・感想

- ◎私たちはICTの活用法をもっと勉強しなければならない。同時に、生徒はICTを活用してどのように授業を改善してほしいと考えているのかにも耳を傾けたい。
- ◎私たちがICTに「使われない」ために、教師一人ひとりがICTを使ってどんな授業にしたいのかを明確にして、それを教師間で共有し、練り上げていく必要がある。

打ち明けた。発表者の教師は、「コロナ禍で、各家庭の教育資本の格差が広がり、子どもの進路に対する保護者の考え方もますます多様化している。こんな中だからこそ、いろいろな実践を学んでいきたい」と、率直に思いを語った。

2つめのテーマは、「ICT活用はどこまで進めるべきか」だ。GIGAスクール構想が進み、生徒一人ひとりに公正に個別最適化された学びによって資質・能力を育成する時代が近づいている。発表者の教師の勤務校でも、校内LANやWi-Fiの整備が進み、生徒はClassi（*1）の

を活用したポートフォリオの作成や、ウェブドリルでの演習に取り組んでいる。発表者の教師は、「OST（*2）を使ったスピーキング指導で英語の成績が向上するなど、手応えも感じており、より効果的なICT活用の実践例を学んでいきたい」と意気込みながらも、「ICTを活用して本校の生徒をどのように育てたいのかという目指すべき姿と、そのためにどこまでICT環境を拡充するのかといった、学校としての見通しが必要だと感じている」と、激変する教育環境の中で抱えている課題感を冷静に語った。

「自由に語り合える場」の力を知った私たちに、これから何ができるのだろうか

ニューノーマル時代の指導を 模索する仲間として

オンラインミーティングの後半には、2021年度の「若手教師・教育創造MTG」のあり方について意見交換が行われた。メンバーからは、次年度以降もつながりの場を持ち続けたいという声が上がった。

コロナ禍で学校の日常が大きく変化する中、「ニューノーマル時代の指導を模索するような教育活動に挑戦し、その成果や課題を共有し合うことで、若手教師の力を引き出せるのではないか」といった提案からは、臨時休業のような予測困難な状況にも対応できる準備をしたいという危機意識が感じられた。また、「体育祭や文化祭の簡素化など、ニューノーマルを模索する過程で生徒が直

面した不利益を、各校はどのように解消しているのか、テーマを絞って情報交換をしたい」といった意見も上がった。さらには、「メンバー同士で普段の授業を動画などで見せ合い、意見交換してみてもどうか」「我々教師が地域を超えてつながるように、生徒同士を交流させたい」といった提案や、「4月に創刊される『V E W n e x t』本誌でも、若手教師の意見をたくさん取り上げてほしい」といった要望も出された。

この8か月、オンラインミーティングでの気づきや学びを自身の指導改善につなげていった教師は少なくなかった。大きく変化する学校現場に身を置く教師が、自分の考えを自由に語り合うことは、目の前の生徒にとっても必ずプラスになることを、メンバーは証明したのだ。

若手教師・教育創造MTG 参加メンバー 佐藤亮介（北海道・私立札幌第一高校、佐藤紘大（岩手県立遠野高校）、清水絢子（宮城県村田高校）、高秀大作（栃木県立矢板東高校）、浅見和寿（埼玉県教育局立学校部立学校人形町）、森迫恒平（神奈川県立愛川高校）、石黒佳奈（富山県立南砺福野高校）、吉岡弘和（福井県立美方高校）、森田歩美（三重県立神戸高校）、萩原大希（大阪府立枚方なぎさ高校）、山田伸太郎（鳥根県立浜田高校）、川口広司（広島県立広島工業高校）、石田純一（山口県立山口高校）、牧紘平（愛媛県・私立新田青雲中等教育学校）、白藤空（福岡県立八幡南高校）、ほか1人。

*1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社 が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。
*2 ベネッセが提供するサービスの1つで、インターネットを通じてネイティブスピーカーと1対1で英会話ができるサービス。